

ねりま健育会病院

症 例 概 要 患者：70代 女性

病名：左脳梗塞

入院期間：令和7年7月～令和7年12月

経過：令和7年6月に右半身麻痺が出現。近医を受診し、左ラクナ梗塞と診断された。回復期リハビリテーション目的で7月に当院へ入院となった。

内 容

近年、患者さんに対するルックスケアの重要性が注目されており、機関誌OTジャーナル2026年2月号で特集もくまれ、看護・介護・セラピスト向けに研修も開催されている。今回、脳卒中による心身機能やADL低下により精神面の低下を認めた患者さんに対して、チームで化粧療法や役割の再獲得など、精神賦活に取り組み、精神面の向上とADL自立、在宅復帰を支援することができたため、報告する。

症例は、入院時、BRSで上肢IV、手指II、下肢IIIの麻痺を認め、BBSは13点、FIMは運動項目29点・認知項目22点で全般介助を要していた。ADLは起居・移乗を含め介助で、高次脳機能障害に伴う動作の不確実性もあり、ご本人は今後へ大きな不安を抱えていた。

こうした中、チームは「自宅への復帰」という目標に向け、多職種が一丸となって支援を展開した。医師は全身状態の管理と内服調整を通じて回復の土台を築き、看護師は病棟生活の細部に目を配りながら心理的な動揺に寄り添う支援を継続。セラピストにおいては、PTが移動能力、OTがADL、STが高次脳機能障害へのアプローチを専門的に実施した。さらにMSWがご家族との架け橋となって退院後の生活をコーディネートし、栄養科は調理訓練における具体的な栄養アドバイスを行うなど、全員が専門性を重ね合わせ、一人の患者さんを支える体制を整えた。

早期から装具を作製し立位、歩行訓練を実施、2か月経過時には車椅子移動が自立したが、その矢先にブレーキ操作の不注意による転落事故が発生した。入院後3から4か月目には、歩行が安定する一方で、思い通りに回復しない手足の麻痺や、以前の自己と向き合う中で、調理などの複雑な動作には消極的な場面や自信の無い様子が見受けられていた。

この頃、当施設の親身な対応のTQM活動で化粧療法に取り組んでおり、その対象者としてチームで推薦し、まずは化粧や美容といった女性らしい楽しみをリハビリに取り入れ、少しずつ心のエネルギーや自信を蓄える支援を行った。敬老祭では、看護学生も参加した化粧ブースへご案内し、スタッフとともに化粧に取り組み、その後、非常に良い表情でご家族とも交流することができ、神輿にも前向きに参加することができた。その後も定期的にルックスケアは継続。また、ご自宅が遠方であったが、現地へ赴い

て家屋調査を実施。娘さんと共に動線や動作を一つひとつ確認した。この丁寧なやり取りを通じて、娘さんの介護不安が和らいただけでなく、ご本人の中でも自宅生活のイメージが芽生える大切な転換点となった。

入院後5か月目には、高まってきた意欲を確かな自信へと繋げるため、毎日16時50分から定例化した「集団リハビリ」のリーダーという新たな役割を提案した。病棟の自主トレ係と協力し、他患者さんをリードし励ます役割を担っていただいたところ、ご本人の表情には誇らしさと活気が生まれた。人から頼られる成功体験が大きな力となり、あんなに消極的だった調理訓練にも「豚汁なら作ってみる」と前向きに挑戦されるようになった。

退院時には、BRSですべてIV段階、BBSは47点、FIMは運動項目81点・認知項目28点と目覚ましい回復を遂げ、無事自宅退院を迎えられた。介助が必要で精神的な不安や自信低下していた日々であったが、ルックスケアや主婦としての役割、集団訓練のリーダーとしての役割など、段階的に役割活動を通して自信を取り戻していくプロセスをチームで支援し、患者さん様を一人の「役割を持つ人間」として尊重し続けた、チーム全員の親身かつ愛情をもった対応が実を結んだ結果であるといえる。